

「手づまりの時代」を超えて

一般財団法人青森地域社会研究所
理事長 成田 晋



当研究所は、青森銀行創業100周年記念事業の一環として、1978年7月20日に設立、本誌は同年12月に創刊された。初代理事長を務めた渡辺泰助 青森銀行頭取は、本誌創刊の辞を「今日は、『手づまりの時代』ともいわれる」との言葉で始めている。

当研究所が設立された1978年というと、私が青森銀行に入行した年である。渡辺理事長が「手づまりの時代」と呼んだ通り、高度経済成長から安定成長への転換の過程で、先行き不透明な世相であったことを記憶している。ローマクラブが『成長の限界』を公表し、「人口増加や環境汚染などの現在の傾向が続けば、100年以内に地球上の成長は限界に達する」と警鐘を鳴らしたのが1972年、翌1973年には第1次オイルショックが勃発、翌1974年の我が国は戦後初となるマイナス成長を経験した。1978年には、ガルブレイズが『不確実性の時代』を公表している。かつては社会経済体制の上で、人々に確信を与え得るような哲学が存在し、それが人々の判断力の支えとなっていた。ところが現在においては確信を持ち得る哲学がなくなってしまった。そのような不確実な時代を、いかにして乗り越えていくべきか。

指針なき時代の道標となるべく、当研究所は東北初の地銀系シンクタンクとして設立された。設立趣意書にはこうある。「いま、先進国の仲間入りを果たした日本には、高度成長にともなって、国土にも、そこに住む人間にも深いかげりが生じているのに気がつく。昭和48年の石油ショック以来の低成長路線への転換に際し、失われつつある人間性の回復と国土、資源の問題をエコロジーの観点から見直してみる必要がでてきた。」時まさに、

人間と自然との調和を指向し「人間居住の総合的環境」の整備を目標とする第三次全国総合開発計画、いわゆる三全総の時代である。なお「人間居住の総合的環境」とは、単に身の回りの生活環境をいうのではなく、自然、生活、生産、これら三つの環境を指している。

いみじくも渡辺頭取が、行員に向けた1979年の新年挨拶で、「身の回りを大切にしよう」と呼びかけている。「“世界には一つとして孤立したものはなく、いっさいが互いに原因となりあうという方法で活動している。[中略]おのれのうちに、その存在理由を持つような存在はない。”(土井虎賀寿)[中略]身の回りは閉鎖的ではない。目のうちにはいる人の、そのまた身の回りにはまた誰かがいる。身の回りへのごく日常的なしかもささいな優しさ、思いやり、心くばりは、こうして広がっていくのだ。しかも身の回りは、人間だけの世界ではない。そこには自然がある。人間と自然との共生の世界がある。」

設立から40年余りが経過し、世の中は大きく変化した。青森銀行では、多様化するお客さまのニーズや経営課題、地域の課題に対応し、中長期的なサポートを行うため、2019年10月、コンサルティング会社「あおもり創生パートナーズ株式会社」を設立した。当研究所の業務は同社に引き継がれることになるが、人間と自然との調和という理想は不変であり、それが意識され始めた40年前より通奏低音のように響いている。今も多くの課題を複合的に抱えた「手づまりの時代」であるが、40年にわたり蓄積された財産を地域の未来のために活かし、地域の持続的な発展のために尽力してまいる所存である。